

日本中國學會報 第七十三集  
二〇二二年十月九日 發行 拔刷

『和漢朗詠集』 『新撰朗詠集』 所收 「曉賦」 佚句考

—— 東アジアに流傳した晚唐律賦 ——

陸 穎 瑤

# 『和漢朗詠集』 『新撰朗詠集』 所收「曉賦」 佚句考

——東アジアに流傳した晚唐律賦——

陸 穎 瑤

## はじめに

藤原公任（九六六—一〇四一）によつて編纂された『和漢朗詠集』は、和歌・漢詩文を部立ごとに排列した詞華集である。この書には多くの唐土の詩文佳句が収録され、平安朝中期における貴族社會の漢文學享受の實態を反映している。それら唐人の佳句の多くが先行する『千載佳句』にも見られることは、『和漢朗詠集』が『千載佳句』を佳句採録の素材とし、その享受の傾向を受け継いでいたことを物語る。その後、平安朝後期の文人貴族である藤原基俊（一〇六〇—一一四二）が和漢佳句を合わせるスタイルを襲用し、『新撰朗詠集』を編纂した。兩朗詠集は唐代詩文の輯佚のために貴重な資料を提供する一方、所收唐賦佳句のほとんどがすでに散佚した斷片であるため、その舶來や兩朗詠集に収録されるに至る経緯については、わずかに推測することしかできない。

かつて川口久雄博士は「唐人の賦から麗句のみを摘出した佳句選の何らかを参考にしたかと思われる」と、『和漢朗詠集』所收唐賦佳句は佳句選より採録したと推測した。大曾根章介博士は「唐人の賦の殆

どは、本書の古注に記された『重撰典麗賦選』によるものと思われる。この書は現存しないので内容は不明だが、恐らく唐代の賦を抜萃したものであったのだろう」と指摘し、『通憲入道藏書目錄』に見える『重撰典麗賦選』（典麗賦・典麗賦選とも記される）という書物は「當時廣く流布していたものらしく、それを撰者公任が資料にしたものと思われ」、『和漢朗詠集』の編纂に用いられたことを推測した。<sup>3</sup>『崇文總目』には「典麗賦集六十四卷」<sup>4</sup>、『宋史』藝文志には「楊翱典麗賦六十四卷」「王咸典麗賦九十三卷」<sup>5</sup>など、類似した書名が見られる。また、鄭樵『通志』藝文略も「典麗賦集六十四卷」を著録し、「宋朝楊翱集古今律賦」と注記することから、楊翱が編纂したのは律賦の總集であつたことは明らかである。<sup>6</sup>

近年の研究において、三木雅博氏は『和漢朗詠集』諸古寫本における唐賦佳句の本文と作者注記について綿密に考察を加えた。三木氏は、『重撰典麗賦選』が『和漢朗詠集』所收唐賦佳句の出處となる律賦を多く収録した有用な書物であると認めつつも、「校勘注記が施されている『朗詠集』寫本が全て鎌倉期以降のものばかりである」こと、「これだけの箇所において題名や本文の字句に異同を有する」ことに

に基づき、当該書を『和漢朗詠集』編纂の資料と考えるのは危険である  
と指摘した。三木氏の推測によれば、『重撰典麗賦選』は日宋貿易が  
盛んな時にもたらされ、菅家や江家の學者たちによつて『和漢朗詠  
集』の校勘に用いられたものである。

『和漢朗詠集』所收唐賦佳句の研究は関連資料がごく限られている  
が、日本と同様に漢文學の薰陶を受け、古代東アジアの漢文學交流で  
重要な役割を擔つた朝鮮半島の文人・文學を視野に入れると、いくつ  
かの新たな知見を得ることが出来る。本稿では、『和漢朗詠集』『新撰  
朗詠集』所收の唐賦佚文とされる「曉賦」の佳句に着目し、「曉賦」  
の句と新羅末期の文人・崔致遠の作と傳わる「詠曉賦」の句との近似  
性を指摘した上で、『和漢朗詠集』古寫本注記や中國南宋期の文獻に  
見られる「曉賦」の作者に關する諸説を改めて検討する。日中韓の古  
文獻に見られる「曉賦」を通して、古代東アジア漢文學交流の一斑を  
窺いたい。

## 一、「兩朗詠集所收「曉賦」佚句

### および作者注記の問題點

まず傳藤原行成筆御物粘葉本を底本とする岩波古典文學大系本に據  
り、出處を「曉賦」と注記される佳句を示すと、以下の通りである。<sup>(8)</sup>

64 誰家碧樹、鶯啼而羅幕猶垂、幾處華堂、夢覺而珠簾未卷。(誰  
が家の碧樹にか、鶯啼いて羅幕猶ほ垂れたる、幾の處の華堂にか、夢覺  
めて珠簾未だ卷かざる。)

416 佳人盡飾於晨粧、魏宮鐘動、遊子猶行於殘月、函谷雞鳴。(佳  
人盡くに晨粧を飾る、魏宮に鐘動く、遊子猶ほ殘月に行く、函谷に鶏鳴く。)

417 幾行南去之雁、一片西傾之月。赴征路而獨行之子、旅店猶局、

泣胡城而百戰之師、胡笳未歇。(幾行ぞ南に去る雁、一片西に傾く月。  
征路に赴いて獨り行く子、旅店猶ほ局せり、胡城に泣いて百たび戰ふ師、  
胡笳未だ歇まず。)

418 嚴粧金屋之中、青蛾正畫、罷宴瓊筵之上、紅燭空餘。(嚴粧  
金屋の中に、青蛾正に畫き、罷宴瓊筵の上に、紅燭空しく餘れり。)

510 邊城之牧馬連嘶、平沙渺々、江路之征帆盡去、遠岸蒼々。(邊  
城の牧馬連りに嘶ゆ、平沙渺々たり、江路の征帆盡くに去んぬ、遠岸蒼々  
たり。)

御物粘葉本ではこれらの佳句の作者が記されないため、各種の『和  
漢朗詠集』古寫本・古筆切・古注釋の注記を探るしかない。古寫本の  
うち、前田侯爵家所藏傳二條爲氏筆本(爲)・池田龜鑑博士所藏影  
寫傳世尊寺行尹筆本(尹)・岩瀬文庫所藏延慶本(延)・古梓堂文  
庫所藏嘉曆本(嘉)・京都府立圖書館所藏古抄本(京、鎌倉末期の書  
寫か)には作者注記が見られる。

作品番號64の句に、尹・延・嘉は「張讀」、爲は「謝觀」、京は「張  
讀 謝觀」とそれぞれ記す。416の句に、尹・爲・延は「賈嵩」、嘉は  
「賈嵩作也」と記す。417の句に、尹・嘉は「謝觀」、延は「謝讀」、爲  
は「謝觀」および傍注に「張讀イ」と記す。418の句に、爲・延は「謝  
觀」、尹は「張讀」、嘉は「張讀 謝觀」と記す。510の句に、爲・延・  
嘉は「謝觀」、尹は「謝觀 張讀南」と記す。また、最近影印出版さ  
れた三河鳳來寺舊藏曆應二年(二三三九)『和漢朗詠集』寫本では、64  
の句は「張讀」、416の句は「賈嵩」、417の句は「謝觀」、418の句は「同  
張讀南」、510の句は「謝觀張讀南」とそれぞれ作者情報を記す。<sup>(9)</sup>

諸古寫本の書寫者のうち、二條爲氏・世尊寺行尹はともに藤原北家  
の末裔にあたり、曆應二年寫本の書寫者である藤原師英は藤原式家の

儒者である。傳二條爲氏筆本に記される「謝觀」は、藤原北家の家藏漢籍より得られた情報を反映すると推測できる一方、傳世尊寺行尹筆本と藤原師英筆本においては、「張讀」という藤原南家の書籍による知識を併記した。中世の公卿たちが必ずしも同じ寫本もしくは刊本を閲讀していないとはいえ、このように「曉賦」作者に關して明らかな異説が現れることは、改めて當時流布していた漢籍の多様性を意識させる。

また、『和漢朗詠集』古筆切のうち、傳源賴政筆平等院切は510の句の作者を「謝觀」と注記し、傳西行筆朗詠集切は同句に「謝觀」と注記する。傳世尊寺經朝筆大字切は416・417・418の三句を寫して、418の句に「已上謝觀曉賦」と注記し、傳冷泉爲之筆朗詠集切は416の句に「賈嵩」と注記する。

次に『和漢朗詠集』古注釋を整理しておこう。某氏藏正安二年（一三〇〇）奥書本（正安本）・專修大學圖書館所藏建長三年（一二五二）菅原長成寫本（建長本）・天理圖書館所藏貞和三年（一二四七）安倍直明寫本（貞和本）は、いずれも「朗詠江注」の書入れを持つ主要な寫本である。正安本・建長本はともに卷上のみが現存し、64の句に正安本は「謝觀張讀」、建長本は朱筆で「賈嵩」と記す。比較的完全に傳わる貞和本は、64の句に「張讀」、416の句に「賈嵩」、417の句に「謝觀 張讀」、418の句に「張讀南 謝觀」、510の句に「謝觀 張讀南」と注記する。

建長本は菅家の學問を傳承するテキストであり、建長本を弘安三年（一二八〇）に寫した抄本を底本とする貞和本は、併せて藤原南家の所藏漢籍に見られる「曉賦」作者に關する情報をも記したのであるが、なぜか64の句の作者について兩寫本は異なる名前を記す。おそらく書

き手の見解によつて改めたものと思われる。

さらに、平安朝末期に成立した釋信阿撰『和漢朗詠集私注』において、應安四年（一三七二）に書寫され、殘本として收藏される書陵部本は64の句に「張讀作 謝規イ」と注記し、傍注では「張讀」に「唐人」と、「謝規」に「日本人」と注記する。東京大學文學部國語研究室所藏本（殘花書屋舊藏、鎌倉時代の寫本）では、64の句に「春曉賦。謝觀、或張讀」、416の句に「賈嵩」、417・418の句に「謝觀」「謝觀作也」「謝觀」とそれぞれ記し、この三句を謝觀の作とする。私注系とはほ同時に成立した、釋無名なる人物の編で鎌倉時代中期の成立とされる『和漢朗詠注抄』（注略抄とも題される）の場合、現存する東北大學附屬圖書館狩野文庫所藏本・身延文庫本・黒木典雄舊藏本のうち、「曉賦」佳句に關する部分が殘されているのは狩野文庫所藏本のみである。當該寫本は64の句に「曉賦 謝規 有本張讀作」と注記し、「規」の字の傍らに「觀」の字を記す。おそらく『私注』に従つて謝觀を作者とする一方、別の寫本によつて知り得た「張讀」の名前をついでに記したのであろう。

以上のように、「曉賦」佳句の作者に關する『和漢朗詠集』古寫本・古筆切・古注釋の各種注記を整理すると、作品番號416の句は賈嵩「曉賦」より採録したことがほぼ確定できるが、64・417・418・510の四句の作者は「謝觀」なのか「張讀」なのか、二説に分かれて定かではない。通行の『和漢朗詠集』校注はおおむね『私注』を根據とする川口博士の校注に従つて64の句を謝觀の作とするが、確かな證據がないことも看過できない。

『新撰朗詠集』も「曉賦」の二句を收録している。現存最古の寫本である穗久邇文庫本を影印した日本古典文學影印叢刊本に據つて、以

下に示す。なお、作品番號は川村晃生・佐藤道生編『新撰朗詠集 校本と總索引』（三彌井書店、一九九四年）に従った。

388 愁思婦於深窗、輕紗漸白、臥幽人於古屋、暗隙纔明。（思婦を深窓に愁へしむれば、輕紗漸くに白し、幽人を古屋に臥せしむれば、暗隙纔かに明らかなり。）

414 華亭風裏、依依之鶴唳猶聞、巴峽雨中、悄悄而猿啼已息。（華亭の風の裏に、依依たる鶴の唳き猶ほ聞こゆ、巴峽の雨の中に、悄悄たる猿の啼き已に息んぬ。）

この二句の作者について、『新撰朗詠集』諸本の注記は比較的明瞭である。穂久邇文庫本ではいづれも「曉賦 謝觀」と記すほか、二句とも題目を記さない宮内廳書陵部所藏本、414の句の題目を記さない寛永八年刊本、388の句の作者を記さない龍門文庫所藏本を除き、梅澤記念館舊藏本（現在は東京國立博物館所藏）・陽明文庫所藏本・龍谷大學圖書館所藏本・ハーバード大學附屬フォッグ美術館所藏本・宮内廳書陵部所藏本などの諸本はすべて同じ題目と作者を記す。

『新撰朗詠集』所收唐詩佳句は多く、『千載佳句』と重複し、『和漢朗詠集』と同じく、『千載佳句』を利用したことは明らかであるが、唐賦佳句の採録に關して、この二句と『和漢朗詠集』中の「曉賦」諸句との關係は不明のままである。『和漢朗詠集』所收のものと『新撰朗詠集』所收のものがはたして同じ作品の句か否かはつきりせず、兩朗詠集研究において懸案の一つとなっている。

ところが、朝鮮の漢文文獻に目を向けると、兩朗詠集の「曉賦」佳句、およびその本文をめぐる疑問点をいささか解決できる手がかりを見つけることができる。注目すべきは、崔致遠の作とされる「詠曉賦」の存在である。

## 二、朝鮮・中國文獻に見える「詠曉賦」

新羅末期の文人・崔致遠（八五七—？）は、少年期に唐土に留學して進士科に及第した後、淮南節度使高駢の幕府で掌書記の職を務めた。その卓越した漢文の才能により、晩唐期の文壇で活躍した一人である。歸國後、崔致遠は高駢の幕府で作った詩文を自ら編纂し、『桂苑筆耕集』をなした。『桂苑筆耕集』は早く唐土に傳わり、『崇文總目』や『新唐書』藝文志に著録される。近代になると、崔國述は朝鮮半島に傳わる崔致遠の他の詩文を輯佚・編集し、『孤雲先生文集』（以下、『文集』と略す）を刊行した。「後孫國述」、すなわち崔致遠の末裔と自稱する崔國述は「孤雲先生文集編輯序」の末尾に「旃蒙赤奮若林鐘月金藏之日」と記しており、乙丑の年に作られたことが分かる。同書所收の「丙寅六月下浣後學光州盧相稷謹書」（丙寅六月下浣、後學の光州盧相稷 謹んで書す）と記す盧相稷（二八五—一九三二）「孤雲先生文集重刊序」、および「族祖國述氏既編且刊之、在教於是役、與有聞焉」（族祖の國述氏既に之を編みて且つ刊し、在教は是の役に於いて、聞く有るに與る）と述べる崔在教の跋文によれば、『文集』が一九二六（丙寅）年に重刊されたことが確定できる。『文集』は木版の重刊本のみが現存し、李基白氏の推論によると、わずか一年前の一九二五年（乙丑）の初刊とするのは不自然であるため、崔國述が朝鮮王朝の高宗李煥二年（一八六五）にはじめて「孤雲先生文集」を刊行した可能性が高いという。<sup>①②</sup>

また、輯佚の仕事について崔國述は次のように述べている。<sup>③</sup>  
今所傳者、只有桂耕集・經學隊仗、其他若干、則散出無紀、不復讀閱。余乃搜拾於樂府・文選・野史・僧傳、僅得三編二冊、竊嘆耳目之不能多及也。幸有博雅君子、不惜廣採而備悉之。則不但

能爲此役之光、其於尊賢慕道之地、不覺深賀萬萬云爾。

今傳ふる所の者、只だ桂耕集・經學隊仗有るのみ、其の他若干は、則ち散出して紀無く、復た讀閲せず。余乃ち樂府・文選・野史・僧傳に搜拾し、僅かに三編二冊を得たり、竊かに耳目の多く及ぶ能はざるを嘆くなり。幸ひに博雅の君子有りて、廣く採りて備に之を悉くすを惜しまざらんことを。則ち但だに能く此の役の光と爲すのみならず、其の尊賢慕道の地に於いて、覺えず深く賀して萬萬たりと爾云ふ。

崔國述が各種の詩文總集や野史・僧傳など古文獻より崔致遠の詩文を網羅して、『文集』を編纂したことが分かる。『文集』所收漢詩文のほとんどが『青丘風雅』『三韓詩龜鑑』『東文選』など朝鮮時代の詩文總集に見られ、とりわけ七言律詩「登潤州慈和山上房」は、遡つて高麗時代前期に成立したという『夾注名賢十抄詩』にも収録される。この詩の領聯二句は『千載佳句』地理部・山水にも採られ、詩題を「登慈和山」（慈和山に登る）と略す。新羅出身の文人が唐の地で作つたこの詩がすぐさま日本にも傳つた、という事實は實に興味深い。

ただし、『文集』卷一所收の「詠曉」（曉を詠ず）と題する賦は他の古典籍に見えず、流傳の經緯も一向に明らかでない。以下に全文を掲出する。

玉漏猶滴、銀河已回。彷彿而山川漸變、（a）參差而物像將開。  
高低之煙景微分、認雲間之宮殿、遠近之軒車齊動、生陌上之塵埃。  
晃蕩天隅、蔥籠日域。殘星暎遠林之梢、宿霧隱長郊之色。①華亭  
風裏、依依而鶴唳猶聞、巴峽月中、迢迢而猿啼已息。隱映青帘、  
村迴而雞鳴茅屋、熹微朱閣、巢空而鷺語雕樑。罷刁斗於柳營之內、  
儼簪笏於桂殿之傍。②邊城之牧馬頻嘶、平沙漠漠、遠江之孤帆盡

去、古岸蒼蒼。漁簞聲瀏、蓬艸露瀼。千山之翠嵐高下、四野之風煙深淺。③誰家碧檻、鶯啼而羅幕猶垂、幾處華堂、夢覺而珠簾未捲。是夜寰紫擘、天地晴。蒼茫千里、瞳矓八紘。潦水泛紅霞之影、疏鐘傳紫禁之聲。④置思婦於深閨、紗窗漸白、（b）臥愁人於古屋之月。動商路獨行之子、（c）旅館猶獨、駐孤城百戰之師、胡笳未歇。砧杵聲寒、林巒影疏。斷蛩音於四壁、肅霜華於遠墟。⑥粧成金屋之中、青蛾正畫、宴罷瓊樓之上、紅燭空餘。及其氣爽清晨、魂澄碧落。萬高影於夷夏、蕩回陰於巖壑。千門萬戶兮始開、（d）洞乾坤之寥廓。

玉漏猶ほ滴たり、銀河已に回る。彷彿として山川漸く變はり、參差として物像將に開かんとす。高低の煙景微かに分かれ、雲間の宮殿を認む、遠近の軒車齊しく動き、陌上の塵埃を生ず。天隅に晃蕩として、日域に蔥籠たり。殘星 遠林の梢に映じ、宿霧長郊の色を隠す。華亭の風の裏に、依依たる鶴の唳き猶ほ聞こゆ、巴峽の月の中に、迢迢たる猿の啼き已に息んぬ。青帘に隱映す、村迴りて雞 茅屋に鳴く、朱閣に熹微たり、巢空しくして鷺 雕樑に語る。刁斗を柳營の内に罷め、簪笏を桂殿の傍に儼かにす。邊城の牧馬頻りに嘶ゆ、平沙漠漠たり、遠江の孤帆盡く去んぬ、古岸蒼蒼たり。漁簞 聲は瀏として、蓬艸 露は瀼たり。千山の翠嵐高下にして、四野の風煙深淺なり。誰が家の碧檻にか、鶯啼いて羅幕猶ほ垂れたる、幾の處の華堂にか、夢覺めて珠簾未だ捲かざる。是の夜寰紫擘は、天地晴る。蒼茫たる千里、瞳矓たる八紘。潦水は紅霞の影を泛かべ、疏鐘は紫禁の聲を傳ふ。思婦を深閨に置けば、紗窗漸くに白し、愁人を古屋に臥らしむれば、暗牖

纒かに明らかなり。俄かにして曙色微かに分かれ、晨光發せんと欲す。數行 南に飛ぶ雁、一片 西に傾く月。商路に動いて獨り行く子、旅店猶ほ肩せり、胡城に駐<sup>と</sup>まつて百たび戰ふ師、胡笳未だ歇まず。砧杵の聲寒く、林巒の影疎<sup>まば</sup>らなり。蛩音を四壁に斷ち、霜華を遠墟に肅す。粧は金屋の中に成り、青蛾正に晝く、宴は瓊筵の上に罷み、紅燭空しく餘れり。其の氣 清晨に爽やかに、魂碧落に澄むに及びて、高影を夷夏に藹し、回陰を嚴壑に蕩す。千門萬戸始めて開き、乾坤の寥廓たるを洞す。

『廣韻』によれば、以下の八種の韻を用いて、律賦の規則を嚴格に守っている。(1)「回」は上平聲十五灰、「開」「埃」は上平聲十六哈に屬し、通用する。(2)「域」「色」「息」は入聲二十四職。(3)「樑」「灤」は下平聲十陽、「傍」「蒼」は下平聲十一唐に屬し、通用する。(4)「淺」は下平聲一先、「卷」は下平聲二仙に屬し、通用する。(5)「晴」「聲」は下平聲十四清、「紘」は下平聲十三耕、「明」は下平聲十二庚に屬し、通用する。(6)「發」「月」「歇」は入聲十月。(7)「疎」「墟」「餘」は上平聲九魚。(8)「落」「壑」「廓」は入聲十九鐸。つまり、「詠曉賦」が既成の佳句を組み合わせて成ったものではなく、最初から一篇の律賦として制作されたものであることを示す。文章としての評價はさておき、最も注目には値するのは、傍線部の①②③④⑤⑥句が前に挙げた兩朗詠集に収録される「曉賦」佳句と酷似することである。以下に文字の異同だけを挙げておく(「傳崔致遠作詠曉賦」を「崔」、兩朗詠集をそれぞれ「和」「新」と記す)。

- ① 一新 414 崔「而」 一新「之」、崔「月中」 一新「雨中」、崔「迢迢」 一新「悄悄」  
② 一和 510 崔「頻」 一和「連」、崔「漠々」 一和「眇々」、崔「遠

『和漢朗詠集』『新撰朗詠集』所收「曉賦」佚句考

江」 一和「江路」、崔「孤帆」 一和「征帆」、崔「古岸」 一和「遠岸」  
③ 一和 64 崔「碧檻」 一和「碧樹」、崔「捲」 一和「卷」。  
④ 一新 388 崔「置」 一新「愁」、崔「深閨」 一新「深窗」、崔「愁人」 一新「幽人」、崔「暗牖」 一新「暗隙」。  
⑤ 一和 417 崔「數行南飛之雁」 一和「幾行南去之雁」、崔「動商路獨行之子」 一和「赴征路而獨行之子」、崔「旅館」 一和「旅店」、崔「駐孤城百戰之師」 一和「泣胡城而百戰之師」  
⑥ 一和 418 崔「粧成」 一和「嚴粧」、崔「宴罷」 一和「罷宴」

三木雅博氏は『和漢朗詠集』諸古寫本に見える本文の相違点について、(一)佳句の訓讀からくる本文の改變、(二)字音を契機として行われた本文の改變、(三)和訓や字音と關わりのない本文の改變、という三種類に分けて説明している。傳崔致遠作「詠曉賦」と兩朗詠集佳句本文との相違については、「頻」と「連」、「商路」と「征路」、「孤城」と「胡城」、「宴罷」と「罷宴」のように、訓讀もしくは同じ字音による異文と解釋できるが、多くは漢文テキストから轉寫する時に前後の文字による誤寫、もしくは字形の近似による異文と考えるのが妥當であろう。

たとえば、②句に見える「遠江」と「江路」、「古岸」と「遠岸」の違いは、「古岸」を轉寫する時に前句の「遠」の字に移りして「遠岸」となったと考えられる。「檻」と「樹」、「漠々」と「眇々」などは、字形の近似によつて生じた異文であろう。もちろん、これらの異文は兩朗詠集の採録によつて生じたとは限らず、日本に將來された以前にすでに存在していた可能性も否めない。

また、傳世尊寺行尹筆本には418の句に「件賦有八隔句七爲秀句」という注記があり、「七爲秀句」は賈嵩の句および『新撰朗詠集』の佳

句を合わせて数えているかは不明だが、貞和本では同句に「件賦有八隔句爲秀句」という注記があり、「八隔句」という本文の特徴は傳崔致遠作「詠曉賦」と一致する。平安朝に舶來した「曉賦」本文が「詠曉賦」そのものであるという推論を導く、有力な傍證となり得るであろう。

「詠曉賦」の全篇は唐代以降の中國文獻に見当たらないが、傍線部の(a)～(d)句は、南宋・陳元龍が周邦彥(字は美成)の詞集『片玉集』に注を施した『詳注周美成詞片玉集』(以下、『詳注片玉集』と略す)に見られる。その巻五「蕙蘭芳引」の「對客館深局、霜草未衰更綠」(客館深く局づるに對し、霜草未だ衰へず更に綠なり)という句の注には、

吳融詠曉賦、旅館猶局。謝玄暉詩、春草秋更綠。

吳融「曉を咏ずる賦」に、「旅館猶ほ局せり」と。謝玄暉詩に、

「春草 秋更に綠なり」と。

と、吳融「詠曉賦」の句として(c)を引用する。同様に、(b)は卷六「夜遊宮」の「古屋寒窗底」(古屋 寒窗の底)という句の注に見える。

吳融詠曉付、卧幽々於古屋。

吳融「曉を咏ずる付」に、「幽々たるを古屋に卧せしむ」と。

卷九「一寸金」の「渡口參差正寥廓」(渡口參差として正に寥廓たり)の句の注には、

吳融詠曉賦、參差而物象將開。又云、動乾坤之寥廓。

吳融「曉を咏ずる賦」に、「參差として物象將に開かんとす」と。又た云ふ、「乾坤の寥廓たるを動かす」と。

と、(a)と(d)の二句を「參差」「寥廓」の語の用例として引いて

いる。「卧幽々於古屋」は、このままでは意味を解しがたく、おそらく「人」の字が踊り字の「々」と形が似ているため誤つたのであろう。もとは「卧幽人於古屋」に作るとすれば、『新撰朗詠集』作品番號388の句と一致し、『詳注片玉集』の引用はある程度原文の形を留めるかと思われる。そのほか「賦」と「付」、「動」と「洞」、「像」と「象」は、發音が近似するゆえに生じた誤りか。『詳注片玉集』の引く「吳融詠曉賦」の四句は、傳崔致遠作の「詠曉賦」と重複するため、おそらく同一の文章であろう。また、朝鮮半島において、朝鮮王朝初期の名臣・學者の成俔(一四三九—一五〇四)は、「金良鏡詩集序」において次のように「唐吳融詠曉賦」に言及する。

余少時知讀書、習學子業、見新涼賦、愛其詞語俊邁、與唐吳融詠曉賦相上下、別騷中一體也。

余は少き時 書を讀むを知り、擧子の業を習ひ、「新涼の賦」を見て、其の詞語俊邁にして、唐の吳融の「曉を咏ずる賦」と相ひ上下し、騷の中の一體を別つを愛するなり。

金良鏡(のちに名を「仁鏡」に改めた。?—一二三五)の「新涼賦」について、その言葉遣いは吳融「詠曉賦」に匹敵するほどすばらしく、『楚辭』「離騷」のスタイルを模したものであると述べる。金氏の賦はすでに散佚しており、これ以上の手がかりはないが、もし成俔が目にしたのが『詳注周美成詞片玉集』と同一の「吳融詠曉賦」であるとすれば、この記述は「詠曉賦」が朝鮮半島で吳融の作として流傳した痕跡と見なせる。

### 三、「曉賦」の作者問題

以上の通り「曉賦」に關する各種の古文獻の記述を整理すると、作



者に關しては少なくとも謝觀・張讀・崔致遠・吳融という四つの説がある。以下、四説を逐一検討し、作者である可能性の最も高い文人を割り出してみたい。

### (一) 張讀説

張讀(八三三―八八九)は中唐の名臣・張薦の孫であり、『遊仙窟』の作者として日本で名高い張鷟の末裔である。志怪傳奇集『宣室志』の著述で知られる一方、『新唐書』張薦傳では「幼穎解、大中時第進士」(幼くして穎解なり、大中の時進士に第す)と、幼い頃から聰明穎悟で、宣宗の大中年間(八四七―八六〇)に進士及第したと記される。近年紹介された新出の張讀墓誌によると、彼は「七歳爲文、偏好八韻賦」(七歳にして文を爲し、偏へに八韻の賦を好む)、また「下筆皆心胸中奇絶語、賦成、旋爲人取去」(筆を下せば皆な心胸の中の奇絶なる語にして、賦成れば、旋ちに人に取り去らる)という。『唐摭言』にも「張讀亦幼擅詞賦、年十八、及第」(張讀亦た幼くして詞賦を擅にし、年十八にして、及第す)とあり、賦の制作能力の高さは彼が若くして及第した一つの要因であろう。

『和漢朗詠集私注』によれば、『和漢朗詠集』は「張讀」の作として「閑賦」の四句(113・604・614・615)、「愁賦」の二句(307・403)を収録する。ただし、「曉賦」の句を張讀の作とする説には他に裏付けがなく、鎌倉時代の『和漢朗詠集』古寫本が據る藤原南家傳承漢籍も不明であり、可能性は低いと考えられる。

### (二) 吳融説

吳融(八五〇―九〇三)も律賦に長けた晚唐文人の一人である。『唐摭言』には「吳融、廣明・中和之際、久負屈聲。雖未擢科第、同人多贊謁之如先達。有王圖、工詞賦、投卷凡旬月、融既見之、殊不言」

(吳融は、廣明・中和の際、久しく屈聲を負ふ。未だ科第に擢でられずとも、同人多く贊もて之に謁すること先達の如し。王圖有り、詞賦に工みにして、投卷すること凡そ旬月、融は既に之を見、殊に言はず)と記し、吳融は科擧合格前にすでに律賦制作で文名を馳せ、王圖などの同時代の多くの人々は吳融に文章を送り届け、評價を求めたという。その賦集は唐宋の官私書目に見られないが、『宋史』藝文志は「吳融賦集五卷」を著録する。

吳融説を提起したのは唯一『詳注片玉集』のみであるが、注釋者の陳元龍および同書の序文を書いた劉肅の事跡は、二人とも明らかでない。現存最古の黃丕烈舊藏宋本が南宋の嘉定四年(一二二二)に刊行されたため、遅くともそれ以前に成立したことが確定できない。吳則虞氏は、『直齋書錄解題』が著録する「清真詞二卷後集三卷」は『詳注片玉集』よりも早く成立したと推論する。それに基づいて『詳注片玉集』が淳熙九年(一一八二)以降に成立したという一説もある。ただし、前述の題目に觸れるのみの成侃「金良鏡詩集序」を除いては、吳融説も張讀説と同様に有力な傍證となる資料が存在せず、戦亂の中で多くの書籍が散佚してしまつた南宋時代に成立した書物として、「曉賦」の作者を誤傳した可能性が高いと言えよう。

### (三) 崔致遠説

崔致遠が中和六年(八八五)に作つた「桂苑筆耕集序」には、自身の作として「私試今體賦五首一卷」「五言七言今體詩共一百首一卷」「雜詩賦共三十首一卷」「中山覆簣集」一部五卷」「桂苑筆耕集」一部二十卷」を擧げる。このうち、「雜詩賦共三十首一卷」は詩・賦を合わせて収録した別集であり、「私試今體賦」は進士科受験のための律賦の習作であろう。朝鮮半島には、「詠曉賦」のほか後世に傳わつ

た律賦はないが、崔致遠は律賦を多く作っており、律賦の名手と目されたことは想像に難くない。

崔致遠とともに『千載佳句』に佳句が収録される金立之・金雲卿・金可記の三人は、いずれも唐土に留學した經驗を持つ新羅人である。<sup>(36)</sup> 金立之は敬宗朝の寶曆元年（八二五）五月に寶貢進士として入唐し、國子監で學んだ。金雲卿は唐土で出仕し、新羅宣慰副使として母國の新羅へ派遣されたことがあり、兗州都督府司馬の職にも就いた。新羅に一度歸つた後、再び唐に戻り、會昌元年（八四一）には淄州長史に任命された。<sup>(38)</sup> 『東文選』卷八四所收の崔溘「送奉使李中父還朝序」にも「長慶初、有金雲卿者、始以新羅寶貢題名杜師禮榜」<sup>(39)</sup>（長慶の初、金雲卿なる者有り、始めて新羅寶貢を以て杜師禮の榜に題名す）とあり、金雲卿は新羅の寶貢進士として唐ではじめて及第し、朝鮮で名が知られていたことが分かる。金可記については、『太平廣記』卷五三「神仙」の「金可記」條に、彼が道教に心酔し、終南山で修道してその名が宣宗の耳にも届くほど有名な道士になったことなどが記される。<sup>(40)</sup> 歸國する際に、章孝標は「送金可紀歸新羅」という送別詩を作っており、唐の詩人との交遊も窺える。そのほか、『千載佳句』に見られる「朴昂」は、その姓から推測するとおそらく新羅の人であろう。

これらの新羅文人の詩が『千載佳句』に収録されるに至る経緯は不明だが、唐土、特に都の長安周邊や江南地方で活動したため、遣唐使や求法僧など唐に渡つた人々がその詩文を目にする機会はかなり多く、唐土より將來された可能性が高いと考えられる。したがって、「曉賦」が本當に崔致遠の作と認識されたのであれば、すでに『千載佳句』を通して日本で名が知られる作者を、兩朗詠集が異なる名で記す必要はない。少なくとも『私注』や『新撰朗詠集』は崔氏の名をその

まま記すはずであろう。

#### (四) 謝觀説

『私注』が「曉賦」の作者と記す謝觀（七九三―八六五）について、植木久行氏は出土墓誌の「唐故朝請大夫慈州刺史賜緋魚袋謝觀墓誌銘並序」を用いて、その生没年や事跡を考察した。植木氏は墓主の謝觀を『和漢朗詠集』に収める「曉賦」「白賦」などの、賦の作家として知られる」と判断したが、それ以上の證據は提示していない。

謝觀の自撰墓誌によると、彼は咸通六年（八六五）に七十三歳で没しており、逆算すれば生年は貞元九年（七九三）となる。進士及第するまでの自身の勉學について、

生世七歳、好學就傳、能文。及長、著述凡卅卷。尤攻律賦、似得楷模。前輩作者、往往見許。開成二年、舉進士、中第、釋褐曹州冤句縣尉。

世に生まれて七歳、學を好んで傳に就き、文を能くす。長ずるに及び、著述凡そ卅卷あり。尤も律賦を攻め、楷模を得るに似たり。前輩の作者、往往にして許さる。開成二年、進士に擧げられ、第に中たり、褐を釋きて曹州冤句縣尉たり。

と記し、謝觀は律賦の制作が得意で、その作品が年長の文人たちの好評を博したことが分かる。『文苑英華』には謝觀の賦「初雷啓蟄賦」「大演虛其一賦」「王言如絲賦」など計十八篇を収録する。また、『全文』卷七五八所收の謝觀「琴瑟合奏賦」は開成二年（八三七）の進士科試験問題と一致し、この年に進士及第したとする墓誌の記載と矛盾しないため、墓主の謝觀と同一人物であるのは間違いない。

一方、「曉賦」の作者とされる謝觀の佳句は、ほかに「白賦」の二句（374・799）と「清賦」の一句（454）が『和漢朗詠集』に、そして

「白賦」の一句(745)が『新撰朗詠集』に収録されており、しかもこれらの句の作者に關する異説は全くない。『和漢朗詠集』作品番號374の句「曉入梁王之苑、雪滿群山、夜登庾公之樓、月明千里」(曉梁王之苑に入れば、雪群山に滿てり、夜庾公が樓に登れば、月千里に明らかなり)は、唯一中國文獻で確認できる句として特に注目すべきである。『詩話總龜』卷四六「隱逸門」が『郡閣雅談』から採録した逸話を擧げておく。

寇豹不知何許人。與謝觀同在唐崔裔孫相公門下、以詞藻相尙。謂觀曰、君白賦有何佳語。對曰、曉入梁王之苑、雪滿群山、夜登庾亮之樓、月明千里。豹唯唯。觀大言曰、僕已擅名海內、子才調多、胡不作赤賦。豹未搜思、厲聲曰、田單破燕之日、火燎平原、武王伐紂之時、血流漂杵。觀大駭。

寇豹は何許の人なるかを知らず。謝觀と共に唐の崔裔孫相公の門下に在り、詞藻を以て相ひ尙ふ。觀に謂ひて曰く、「君の白の賦は何の佳語か有らん」と。對へて曰く、「曉梁王之苑に入れば、雪群山に滿つ、夜庾亮の樓に登れば、月千里に明らかなり」と。豹は「唯唯」と。觀大言して曰く、「僕已に名を海内に擅にす。子は才調多し、胡ぞ赤の賦を作らざる」と。豹未だ搜思せず、聲を厲まして曰く、「田單燕を破るの日、火は平原を燎く、武王紂を伐つの時、血は流れて杵を漂はず」と。觀大ひに駭く。

謝觀・寇豹二人がそれぞれ白・赤の色を題材にする賦の句を作り、文才をひけらかしたという逸話である。『郡閣雅談』という書物について、『郡齋讀書志』(衢本卷十三、袁本前志卷三下)「郡閣雅言一卷」條に以下のようにいう。

右皇朝潘若同撰。太宗時守郡、與僚佐話及南唐野逸賢哲異事佳言、輒疏之於書。凡五十六條、以資雅言。或題曰郡閣雅談。

『和漢朗詠集』『新撰朗詠集』所收「曉賦」佚句考

右皇朝潘若同の撰。太宗の時 郡に守たり、僚佐と語りて南唐の野逸賢哲・異事佳言に及べば、輒ち之を書に疏す。凡そ五十六條、以て雅言に資す。或いは題して郡閣雅談と曰ふ。

その後、南宋・文天祥の「五色賦記」には、「孟春之二十五日、發舟石鼓。越三日、過衡山、宰趙孟僎送縣志、遺逸門一段云……」(孟春の二十五日、舟を石鼓より發す。三日を越え、衡山に過ぎるに、宰の趙孟僎『縣志』を送る。「遺逸門」の一段に云はく……)と、この逸話を『衡山縣志』の「遺逸門」より知り得たことを記す。

謝觀と寇豹は「唐の崔裔孫相公の門下」にいた同僚同士、すなわち時に衡山地方の長官であり、のちに宰相職に就いて「相公」と呼ばれる「崔裔孫」という人物の幕僚であつたと推測される。「崔裔孫」を崔氏の末裔と解すれば、崔群を指す可能性が最も高い。崔群は元和十四年(八一九)十二月に潭州刺史兼御史大夫充湖南觀察使に左遷され、大和三年(八二九)二月にはまた荆南節度使に任命された<sup>48</sup>。しかも、同中書門下平章事の職についたことがあるため、「相公」と稱される。この逸話に登場する崔氏の幕僚の「謝觀」は、前述の墓主の謝觀と同じく中晚唐期に活躍したため、同一人物である可能性はかなり高いであろう。また、崔群の二度にわたる湖南赴任とともに謝觀が進士及第する開成二年以前のことであり、科擧に應じる「進士」の資格を獲得する前に崔群の幕府に召されたことは、謝觀のような中晚唐期の一文人として普通の生き方と言える。

貞和本『和漢朗詠集』では、この句の「公」字に「亮」と傍記し、さらに「典麗賦選乍亮」(乍は作の略字)と注記する。中國の古典籍に残される本文のように「曉賦」の原文は「庾亮」に作る可能性が高いが、「梁王」と對になる場合、確かに「庾公」の方が妥當であろう。

實際、公任が自身の主張によって佳句の文字を改めたことは、すでに『源氏物語』の古注釋書である『河海抄』で指摘されている。<sup>49)</sup>

四條大納言撰の和漢朗詠集に、陰森枯柳疎槐、春無春色、獲落危牖壞宇、秋有秋聲とあるは、公乘億か連昌宮賦の中の一句也。賦には東韻の列にて、有秋風とあるを色與風鹿對に思はれるにや、聲字にとりかへられたり。色聲の對もこまやかに、風の心も

ありて、興あるよしいひつたへたり。

公任は公乘億「連昌宮賦」の韻字「風」を「聲」に改め、より穩當な對句を求めているようである。白居易の句「可是禪房無熱到」の「可」を「不」に改めたことも指摘されるように、「庾公」に作るのも公任独自の考えによる改竄であろうか。

以上、四人の文人についてそれぞれ検討してみると、「曉賦」（詠曉賦）の作者である可能性が最も高いのは謝觀である、と結論付けられよう。新たな文獻資料の發見がない限り斷言するのは難しいが、『和漢朗詠集私注』の注記や、『和漢朗詠集』所收「曉賦」諸句と同じ律賦を出處とする『新撰朗詠集』の二句の作者注記といった状況證據によつて、現時點では謝觀を「曉賦」の作者と認めてよい。同時に、『和漢朗詠集』64句は張讀ではなく、謝觀の作であることも確定でき

る。中晩唐期には、新羅との外交往來はもちろん、留學生や商人・僧侶など民間の交流も盛んになった。元稹「白氏長慶集序」には「鷄林賈人求市頗切、自云本國宰相每以百金換一篇」（鷄林の賈人 市を求むること頗る切にして、自ら云ふ、本國の宰相毎に百金を以て一篇を換ふ、と）と、新羅の商人が本國の宰相のために白居易詩を高値で買い求めたことを記す。新羅の高官貴族が唐土の詩文に傾倒し、その風潮が民衆に及ん

だことを示す好箇の例である。また、新羅に隣接する渤海國も同様に唐の文化を積極的に學び、唐人の詩賦を収集した。たとえば、劉禹錫「酬楊司業巨源見寄」詩の「渤海歸人將集去、梨園弟子請詞來」（渤海の歸人 集を將て去り、梨園の弟子 詞を請ひて來たる）という句は、渤海國に歸る人が楊巨源の詩集を持ち歸つたことを記す。王建「寄楊十二祕書」にも「新詩欲寫中朝滿、舊卷常抄外國將」（新詩寫さんと欲して中朝に滿ち、舊卷常に抄せられて外國に將く）と、楊巨源の詩が傳寫されて外國にもたらされたことに觸れる。また、唐末の文人・徐夔の律賦が渤海國に傳わり、金粉を入れた墨で屏風に書かれたことは、彼の詩「渤海寶貢高元固先輩閩中相訪、云本國人寫得夔斬蛇劍・御溝水・人生幾何賦、家皆以金書列爲屏障、因而有贈」（渤海寶貢高元固先輩閩中に相ひ訪れて、云へらく、本國人 夔の斬蛇劍・御溝水・人生幾何賦を寫し得て、家皆な金を以て書し、列して屏障と爲すと、因りて贈る有り）の詩題より知られる。こうした國を跨いだ漢文學交流の風潮の中、崔致遠が謝觀の賦を書寫して新羅に持ち歸り、のちに朝鮮半島では崔致遠本人の作とされてしまった可能性が高いように思われる。

### おわりに

以上、本稿は現存する東アジアの漢文文獻を手がかりに、『和漢朗詠集』『新撰朗詠集』に見える「曉賦」佳句を考察し、近代朝鮮の崔國述が編纂した『孤雲先生文集』に収録される「詠曉賦」を兩朗詠集の佳句六句の出處であると指摘したほか、この賦の作者が崔致遠ではなく、『和漢朗詠集私注』に記される謝觀であることを論證した。晩唐律賦の制作狀況や、晩唐律賦が渤海國・新羅・日本に傳わつてそれぞれの地域で享受される様態、特に平安朝貴族社會における晩唐律賦

佳句の朗詠については、別稿で改めて考察したい。

「曉賦」と題する律賦は日本に舶来されたり、崔致遠によつて新羅にもたらされたりなど、東アジアに廣く流布したが、中國本土では類書や總集などに一切見えず、幻の作となつたようである。ただし、『水滸傳』や『白樂天詩集』の刊行で名は馳せる明の武定侯郭勛が編した『雍熙樂府』所收の王舜耕「一枝花・惜花春起早」には、「羅幕猶垂」と「珠簾未捲」が對をなす、「曉賦」中の句を襲用したと思しき箇所がある。

花間杜宇啼、柳外黃鶯囀。銀河迴耿耿、玉露滴涓涓。暫入花園、露濕殘粧面、風吹雲髻偏。畫閣內羅幕猶垂、錦堂上珠簾未捲。

花の間に杜宇啼き、柳の外に黃鶯囀る。銀河迴りて耿耿たり、玉露滴りて涓涓たり。暫らく花園に入れば、露は殘粧の面を濕し、風は雲髻の偏れるを吹く。畫閣の内、羅幕猶ほ垂れ、錦堂の上、珠簾未だ捲かず。

『雍熙樂府』よりもやや遅れて刊行された張祿輯『詞林摘艷』卷八にもこの散曲を収録するが、傍線部の二句は「畫閣內綉幕猶垂、錦堂上珠簾未捲」に作る。また、萬曆年間に生きた胡文煥の輯「群音類選」に収める散曲になると、「畫閣內繡幙又垂、錦堂上珠簾半捲」に作る。文字の異同が多くなるだけではなく、「曉賦」を襲用した痕跡がほぼ完全に消えてしまう。「曉賦」の全文あるいは一部の數句は王舜耕の時代まで傳つたが、ほどなく亡佚してしまい、その存在さえ意識されなくなつたのかもしれない。

注

(1) 陳尙君氏は『全唐詩續拾』（『全唐詩補編』、中華書局、一九九二年）

『和漢朗詠集』、『新撰朗詠集』所收「曉賦」佚句考

『全唐文補編』（中華書局、二〇〇五年）において『和漢朗詠集』を利用する。また、芳村弘道氏は『新撰朗詠集』に晚唐賦の佚句があることに言及する。芳村「唐詩の新資料・朝鮮本『夾注名賢十抄詩』をめぐって―千載佳句―との關連性」（『和漢比較文學』第四〇號、二〇〇八年、一一―二一頁）参照。

(2) 川口久雄・志田延義校注『和漢朗詠集 梁塵祕抄』（岩波書店、一九六五年）二六頁。

(3) 大曾根章介・堀内秀晃校注『和漢朗詠集』（新潮社、一九八三年）三一―三二〇頁。

(4) 『崇文總目』（景印文淵閣四庫全書六七四冊、臺灣商務印書館、一九八三年）卷一一、一三八頁<sup>a</sup>。

(5) 『宋史』（中華書局、一九七七年）卷二百九、五三九四頁、五四〇二頁。

(6) 王樹民點校『通志二十略』（中華書局、一九九五年）藝文略第八、一七六頁。

(7) 三木雅博『和漢朗詠集』所引唐人賦句雜考―出處と享受の問題を中心に―（『和漢朗詠集とその享受 増訂版』、勉誠出版、二〇二〇年、四二五―四四八頁。初出は一九八六年）参照。

(8) 前掲注（2）六三頁、一五五―一五六頁、一八〇頁。

(9) 堀部正二編著、片桐洋一補『校異和漢朗詠集』（大學堂書店、一九八一年）六三頁、一六一頁、一六二頁、一八七頁。

(10) 佐藤道生『三河鳳來寺舊藏曆應二年書寫和漢朗詠集 影印と研究』影印篇（勉誠出版、二〇一四年）二三頁、一二八頁、一四七頁。

(11) 前掲注（9）一八七頁。

(12) 久曾神昇編『和漢朗詠集切集成』（汲古書院、一九九八年）四〇頁、九六頁、一六〇頁。

(13) 伊藤正義・黒田彰他編『和漢朗詠集古注釋集成』第一卷（大學堂書店、

- (14) 一九八九年) 二八―二頁、一六八―一六九頁、一九七頁。  
 前掲注(13) 三一九頁。
- (15) 前掲注(13) 三六九頁、四七二―四七三頁、五〇四頁。
- (16) 前掲注(13) 六四二頁。
- (17) 『新撰朗詠集 金玉集 臨水和歌集』(『日本古典文學影印叢刊』第二冊、貴重本刊行會、一九八一年) 九六頁、一〇一頁。
- (18) 川村晃生・佐藤道生編『新撰朗詠集 校本と總索引』(三彌井書店、一九九四年) 九一頁、九六頁。
- (19) 『崔文昌侯全集』(成均館大學校大東文化研究院影印、一九七二年)「解題」、李時人・詹緒左『崔致遠全集』(上海古籍出版社、二〇一八年)「前言」(二八―二九頁) 參照。
- (20) 『孤雲先生文集 西河先生文集』(『韓國歷代文集叢書』二、景仁文化社、一九九三年) 一一頁。
- (21) 金程宇氏は「讀崔致遠詩文佚句劄記」(『域外漢籍叢考』、中華書局、二〇〇七年、二二二―二三三頁)において、日韓の先行研究を全面的に調査し、『孤雲先生文集』所收詩文の出處を整理した。また最近の研究成果としては、濱田耕策『東文選』と崔致遠の遺文(『史淵』一五二卷、二〇一五年、八五―一二二頁)が參照される。
- (22) 『孤雲先生文集』卷一。前掲注(20) 書、二二―二四頁。
- (23) 三木雅博『和漢朗詠集』古寫本における佳句本文の改變をめぐって(『和漢朗詠集とその享受 増訂版』、一九一―一二二頁。初出は一九八六年) 參照。
- (24) 前掲注(9) 一六二頁。
- (25) 前掲注(13) 一六九頁。
- (26) 顧廷龍等輯『續修四庫全書』(上海古籍出版社、二〇〇二年) 第一七二―三冊、五七九頁a、五八二頁a、五九二頁b。
- (27) 『虛白堂文集』(『韓國歷代文集叢書』七三、景仁文化社、一九九三年) 第三冊、四〇頁。
- (28) 『新唐書』(中華書局、一九七五年) 卷一六一、四九八二頁。
- (29) 陳尙君『宣室志』作者張讀墓誌考釋(『嶺南學報』復刊第七輯、二〇一七年五月、七五―九四頁) 參照。
- (30) 『唐摭言』(中華書局、一九五〇年) 卷三、四三頁。また、前掲注(29) 陳尙君氏論文によれば、張讀墓誌に「年二十、擢進士第」(年二十にして、進士の第に擢でらる) という。
- (31) 『唐摭言』卷五、五六頁。
- (32) 『宋史』卷二〇八、五三三七頁。
- (33) 周邦彥撰、吳則虞校點『清真集』(中華書局、一九八一年) 附録「清真集研究資料・版本考辨」(二七三―二七四頁) 參照。
- (34) 馬莎「陳元龍『詳註周美成詞片玉集』考論」(『詞學』第二輯、華東師範大學出版社、二〇〇九年、五八―六九頁) 參照。
- (35) 『孤雲先生文集』(『桂苑筆耕集』) (『韓國歷代文集叢書』一、景仁文化社、一九九三年) 二頁。
- (36) 朝鮮半島諸國における唐土留學の風習については、嚴耕望「新羅留唐學生與僧徒」をはじめ、歴史學者が多く論じているが、ここでは贅述しない。
- (37) 『冊府元龜』(中華書局、一九六〇年) 卷九九九外臣部、一一七二四頁b 參照。
- (38) 『唐會要』(上海古籍出版社、一九九一年) 卷九五、二〇三二頁參照。
- (39) 『東文選』第四冊(朝鮮古書刊行會、一九二四年) 三四六頁。
- (40) 『太平廣記』(中華書局、一九六一年) 卷五三、三二九頁。また、中國で發見された「興隆碑」には「金可記傳」が刻まれて、傳の内容は『廣記』の逸話に近く、「部分的に事實を反映している」という。土屋昌明

『唐の道教をめぐる高句麗・新羅と入唐留學生の諸問題』（『専修大學社會知性開發研究センター東アジア世界史研究センター年報』第四號、二〇一〇年、一三九―一六五頁）参照。

(41) 『全唐詩』（中華書局、一九六〇年）卷五〇六、五七五三頁。『全唐詩』は「金可紀」に作るが、「金可記」の誤記であろう。

(42) 植木久行「謝觀」（『詩人たちの生と死』唐詩人傳叢考、研文出版、二〇〇五年。初出は一九九〇年）一九四―一九六頁。

(43) 周紹良・趙超編『唐代墓誌彙編』（上海古籍出版社、一九九二年）二四二八―二四二九頁。

(44) 徐松撰、趙守儼點校『登科記考』（中華書局、一九八四年）卷二一、七六七頁。

(45) 阮閣編、周本淳校點『詩話總龜』（人民文學出版社、一九八七年）卷四六、四三八頁。

(46) 晁公武撰、孫猛校證『郡齋讀書志校證』（上海古籍出版社、一九九〇年）五八二頁。なお、引用文中の「潘若同」という人名は「潘若沖」に作るのが正しい。晁公武が避諱のため父親の名にある「沖」の字を「同」に改めた。

(47) 『文山集』（四部叢刊本）卷二一、二〇丁ウ―二一丁オ。

(48) 『舊唐書』（中華書局、一九七五年）卷一五「憲宗本紀」、四七一頁。卷一七上「文宗本紀」、五三二頁。

(49) 玉上琢彌編、山本利達・石田穰二校訂『紫明抄 河海抄』（角川書店、一九六八年）卷一四「柏木」、五〇一頁。『紫明抄』にある類似する記述は三木雅博氏（前掲注（23）論文）に、『河海抄』の記述は柳瀬喜代志氏（『和漢朗詠集異文考』、『日中古典文學論考』、汲古書院、二〇〇〇年、四〇二―四二二頁。初出は一九八七年）などに指摘されている。

(50) 『紫明抄 河海抄』卷五「葵」、二九二―二九三頁。

『和漢朗詠集』、『新撰朗詠集』所収「曉賦」佚句考

(51) 『文苑英華』（中華書局、一九六六年）卷七百五、三六三七頁b。

(52) 『劉夢得文集』（四部叢刊本）外集卷五、十二丁ウ―十三丁オ。

(53) 『全唐詩』卷三〇〇、三四一三頁。

(54) 『全唐詩』卷七百九、八二六―八二六三頁。「家」の字に「一本無家字」という夾注がある。

(55) 郭勛編『雍熙樂府』（四部叢刊續編本）卷九、六丁ウ―七丁オ。

(56) 張祿編『詞林摘艷』（文學古籍刊行社、一九五五年）卷八、九九四頁。

(57) 胡文煥編『群音類選』（中華書局、一九八〇年）卷六、一九三五頁。

本論文は、令和二年十月十日第七十二回日本中國學會大會における口頭発表をもとにしている。司會の佐藤道生先生をはじめ、ご教示を賜った先生方に御禮申し上げます。